鹿角ゼロカーボンラジオ Nice Action! セカンド 第2回(5月15日(木)放送分)の概要

今回は、「世界の燃料価格と私たちの電力料金について」というテーマを取り上げます。

まずは、前回は触れた電気料金の請求書から見てみたいのですが、実は、再エネ賦課金以外にも色々な言葉が並んでいますね。

そういえば、ここに「燃料費等調整単価」という言葉がありますね。これ、前回の再エネ賦課金と同じようにまったくノーマークでした!

よく気が付きましたね!今日は、まずはこの部分を説明しますね。

会社によって異なるのですが、電気料金の内訳の中には「〇〇調整費」とか「〇〇調整単価」と言われる項目があります。

これは、その会社が電気を売るために仕入れた価格が、当初より安く済んだ場合はその分だけ電気代の単価を引いてあげて、当初より高くなった場合はその分だけ単価に追加して請求するというものです。

3月分の請求書を見ると、私が加入しているかつのパワー社は1kWhあたり0.08円のマイナスとなっています。これはほぼ当初の予定通りの価格で仕入れができたという感じですね。

私の請求書では、「マイナス7.19円」となっています。

本当ですね。このように会社によって、具体的な数字は異なってきます。

この会社の場合は、この時期にその会社が想定していたよりも安く仕入れることができたといえますね。

ただし、もとの価格想定の方法も各社ごとに異なり、高めに想定したり、安めに想定したりしています。なので、プラスいくらとかマイナスいくらとかを見て一概にどちらよかったとか悪かったとかはいえないですね。

ところで、電気の仕入れ価格に影響を与えるものはどのようなものだと思いますか。

石油といった燃料価格ですか。

それも一因となります。現在の日本で電気を作るために必要な原料の主なものは天然ガスや石炭といったもので、それぞれが約3割をしめています。これらは輸入しているものですね。つまりこうしたものの値段が上がると、仕入れ価格も上がるので、燃料の調整費も上がり、逆に石炭等の値段が下がると燃料の調整費も下がる傾向となります。

また、為替レートも重要で、円高になると仕入れ価格が下がるので、燃料の調整費も下がる傾向となり、円安になると逆の傾向になるといえます。

ただ、電力会社も、こうした変動を少なくするように、例えば長期固定で買う割合を大きくするなどしているのです。これらはあくまで一因ということとなりますね。

もう一つ、燃料の価格に影響を与えるものは、電気を使う家庭や事業者の需要、つまり電気の利用者の使う量です。これが当初想定より少ないと、原料が余る方向となるので、燃料の価格が安くなり、調整費は安くなる方向に動く可能性が高いですし、当初想定より多くなった場合は、逆の方向に動く可能性が高くなりますね。

ただ、最近のお米の価格をみてもわかるように、最終的な物の価格は多様な要因から決まってくるので、「燃料費等調整単価」についても、今言ったようなもの以外にも含めた要因から決まってくるとはいえます。

大前提として、価格は多様な要素から決まるという点は伝えさせていただきます。

最近では、トランプ関税や戦争など様々なことが起こっていて、燃料費の変動は読みにくいのですが、前回と同様に、この単価が大きく変動すると、みなさまの電気料金の支払いが大きく変わってしまおうので、この話題を取り上げてみました。少しでも参考になれば、よいなと思っています。

ここまでの説明で、電気の原料の価格は、下がる場合はいいですが、大きく上がる場合は、とても困ることということがわかりました。

このリスクを避けるために、調整費による価格変動を少なくすることは大切です。

太陽光発電とか水力発電といった形で、電気の地産地消を増やすことは、外の影響を受けずに安定した値段で電気の原材料を仕入れることができるので、地域のためになり、地域の生活の安心にもつながるといえます。

私たちが進めている電気の地産地消、つまり地元の原料を使って電気を作り地元の方に使ってもらおうという点は、地域のみなさまの生活費の安定にも貢献できると考えています。